
仕官学校 妖冥学園

望月光輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仕官学校 妖冥学園

【Nコード】

N6846L

【作者名】

望月光輝

【あらすじ】

西暦2023年突如として妖怪が人の前に現れ、いきなり現れた異形に人々はあっさりと命を奪われるという大量虐殺が世界のあちこちで起きる

政府の取った対策は特殊能力を持つ子供たちを戦士として扱うことだった

2032年異形の減少により国は本来の動きを取り戻すが未だに存在する異形と戦うために特殊能力を持つ子供ばかりを集めた仕官学校 妖冥学園を設立

そして

2047年現在

学園には至上最悪最低ランクの男（現在進行形で不毛な片思い中）が存在していた

File：1 プロローグ（前書き）

ひさびさに書いたので過去に投稿したものと同じく酷いこと（主に筆者の頭）になっていますが生暖かい目で見守って貰えれば幸いです

File : 1 プロローグ

私立 妖冥学園高等部^{ようめい}

この学園には特殊な学科が存在した

対妖異特殊強化科通称 妖異科^{よういか}その名のとおり妖怪もしくは異形のものを討伐する戦士を育てるために造られた学科であった

西暦2023年突如として妖怪が人の前に現れる

いきなり現れた異形に人々はあっさりと命を奪われるという大量虐殺が世界のあちこちで起きる血の一年間、通称悪夢襲来の始まりであった

異形に対抗するために化学兵器をもちいり超大型の異形を地下に封じ込めることに成功する物の中型と小型の大半を取り逃がす

尚且つ異形の中には兵器による攻撃が効かない物が複数存在する

討伐するためには奴ら自身のもつ特殊能力が最も有効と判明

科学者達は異形の細胞を人に埋め込むことで能力を手にしようと考える

しかし細胞とのシンクロ率が最も高かった被検体は当時15歳まだ子供であった

その後度重なる人体実験の結果細胞に適正があると判断されたのは18以下の子供達ばかり

細胞はまだ成長途中の体にしか適正しなかったのである

実験の結果をもとに政府が出した結論は子供達に細胞を植え付け兵士にすることだった

実験台にされた子供達のおかげで見事に計画は成功し子供達が能力を手にし異形との戦闘を行う

2032年異形の減少により国は本来の動きを取り戻すが未だに存在する異形と戦うために士官学校 妖冥学園を設立

そして

2047年現在

オレこと^{わたり}巨理 紺^{こん}はいわゆる堕ちこぼれだ

妖冥学園妖異科二年参組所属

成績は学園創立以来の最低ランク

今日も今日とて不毛な日常を繰り返している

「だりい」

ポツリと呟いてみるが日常が変わるはずも無く

そして目の前の窮地も変わるわけも無い

『参組の巨理が大型と遭遇！近くの戦闘員は直ちに救助に向かえ！
非戦闘員は至急退避！』

そんなに叫ばなくても聞こえるっーの

とりあえず状況を説明しよう

現在オレは大型の化け物に睨まれている
以上

今まさに青春時代どころか人生を終えそうです

化物がオレに向かつて腕を振り下ろす

ああ、死んだなコレ

死ぬ直前に思い起こすことといえば、アホに千円貸しっぱなしだと
か漫画の新刊買って無いとかそんなくだらないことだ

できることなら彼女くらい欲しかった

できることなら

「^{あいざわ}藍沢さん」

オレ的学園一の美女兼友人の双子の姉と付き合いなかった

一度も喋ったこと無いけど

存在すら認識されてるか微妙だけでも

フワッ

そうそう今オレと化物の間に割って入った

ポニーテールで黒髪でまつげ長い美人みたいな

西洋の神話とかでてきそうな剣のミスマツチ具合がまた美人を逆
に引き立てて素敵だ

いやー人生の最後に美人が拝めるだなんて
アレか捨て猫（ミケ・推定3才）を拾ったから美人の天使が来た
のか

ん？割って入った？

「何をぼさつとしている！」

美人が叫ぶ

どうやら本物だったみたいだ

「戦えないなら下がれ！」

いやー、美人は怒っても素敵だ

「こちら、藍沢 春！大型を^{はる}発見！今から戦闘を行う！」

美人こと藍沢さんが通信機に怒鳴る

おそらく能力で具現化した剣を構えて化物に向かって斬撃を繰り出す
一発で化物が地に沈む

「大型の討伐に成功、今から帰還する」

今の気持ちを表すとするなら

「男女の立場逆じゃね？」

今日も今日とて不毛だった

File 2：日常

「こーんちゃん！」

バンダナをつけた少年こと 白岩 亮が頬にばんそーこうをつけた少年亘理 紺の背中を叩く

「痛って！テメーオレは怪我人だぞ」

「怪我人って結局藍沢さんに助けて貰った分際でなにいうてんねん」
「そうそう、紺の怪我は怪我に入らないよ」

その後ろから畳み掛けるように話しかける髪で片目が隠れた関西弁の 黒井 響と無表情で淡々とした喋り方をする美少年学年主席の弟 藍沢 夏樹

普段からつるんでいる四人組だ

「うるせー、一応大型と戦闘してきた英雄を労われ」
不貞腐れながら背を向ける紺

「まあ、大型と遭遇つてのは不憫だけだな」

ほらご褒美と購買で買ってきたパンを差し出す亮

「わふあればいいのら」

紺はパンをくわえながら答える

「物食べながら喋ったらアカンよ」

母親か！と紺と亮の声がかぶった

「そういえば、紺と姉さんが狩ったのって牛鬼だったらしいね」

やはり淡々とした声で夏樹が語る

「そつか、お前藍沢さんの弟だからやつぱ家で話したりするんだな」

未だに口を動かしている紺に代わり亮が話しかける

「うん、姉さん言ってたよ」

紺に向き直り話す夏樹

「なんらって？」

まだ食べきれないのか未だに舌足らずだが、気になる異性の自分への評価だ尋ねずにはいられない

「いくら最低ランクとはいえあそこまで戦えないと思ってなかった
って」

グサツと紺に見えない刃が突き刺さる

「ギャハハハハ！バカが（いる／おる）……！」

友人若干名の笑い声が教室に響き渡る

「よし、その指へし折っちゃうぞお？」

自分を指差し笑う友人の人差し指を額に血管を浮かせながら掴む

「ギブ！ギブ！」

「アカン！そっちに関節まがらへん！」

指を思いつきり反らされて涙を浮かべてもんどりうつバカ二名

「紺、ほんとに折れちゃうよ」

さすがに夏樹が止めに入る相変わらず無表情だが

「チツ、バカー号、二号今日は勘弁してやらあ」

舌打ちをしつつ手を離れたものの悪役面のままの主人公

「正論言われたからって八つ当たりすんな、アホめ」

「せや、好きな子にええとこ見せよー思うんが間違いや、ハゲめ」

バカー号と二号は涙目で人差し指を擦りつつポツリと呟く

「ほお、その指よほど必要なく見えるが？」

紺は濁った瞳で二人を睨みつける

「紺、紺、明らかに目が濁ってるよ」

傍観しつつ宥めに入る夏樹

「まったく、最低ランクのお前が学年主席で戦闘の能力もあって美人
の藍沢さんと一緒の空間ってか次元にいる時点で間違いだ」

「上等だああー！その喧嘩買ったああー！」

紺を指差し次元レベルから否定する亮に飛び掛って行く紺

「オイ！亘理と白岩が喧嘩してんぞー！」

「マジかよ！どっちに賭けるよ？！」

「はい、かけ金はこっちに持ってきてなー」

掴み合いを始めた二人を見てはやし立てる男子クラスメート
響の所にかけ金を持って行く生徒

賭けを始めた響を喧嘩に引きずり込む中心の二人

壁に持たれかかり僅かに苦笑しながら静観する夏樹

このバカ騒ぎ開始の約2分後食堂に行っている女子生徒が帰ってきて教師に通報され

中心でつかみ合いをしている三人が吹っ飛ばされることになり、その後罰として三人で戦闘にでることになるのだが

とりあえず今は馬鹿しかいないのでそれに気付くことはないのだろう。

File：3 戦場にて

とある廃墟にて

少年たちは、不毛な争いを繰り広げていた

「お前らのせいだからな」

紺の視線は亮と響に

「いーやお前ら二人のせいだ」

亮の視線は紺と響に

「勝手に喧嘩初めて俺まで巻き込んだ自分らのせいや」

響の視線は紺と亮に

三人は睨み合って一歩も引こうとしない

「やんのか、ゴラア」

「上等だ、ゴラア」

「今日こそ殺つたる、ゴラア」

「ねえ、ヤル気ある？」

「」「すんません」「」

鶴の一声こと夏樹の一声にて不毛な争いを休戦させる3バカ

彼らは、今喧嘩の罰として討伐に送られていた

しかし成績最下位とブービー、下から数えたほうが早いというバカ

どもでは不安と言うことで成績上位の夏樹が付き添いできていた

つまり夏樹がいないと三人が無傷で帰還するのはまず無理だろうということで

3バカはなんとしてでも夏樹に残って欲しいのだ

「なんでオレがこんなバカ共と、なあ夏樹いー」

「「いやお前にだけは言われたくない」「」

「うん、紺に言われたら終わりだよ」

真顔で答える学年ブービーと成績下位

よほどコイツにだけはバカと呼ばれたくないらしい
珍しく成績上位までも同意する

「亮に至ってはブービーなんだからオレと変わらねーだろ！」

さすがに亮には反論するものの響と夏樹には反論できないらしい

「アホ、お前の今まで狩ったことのあるやつ言ってみろ！データに残ってるやつだぞ！」

「な、納豆小僧」

「ハイ、死ね」

どもりながら言った紺の頭に鈍い音が叩きつけられるのであった

「んで、今回はなに狩って来いつて？」

亮が夏樹に尋ねる

「えっと、今回は中型で猫又だね」

教師に渡された資料を眺めながら答える

「猫又かぁー、ちつとシンドイな」

「せやね、猫又は動きが素早いから捕まえんのも大変やしな」

「だったらとりあえずどこかに追い込もうか」

「それが一番妥当だろうな」

「じゃあ俺が匂いで捜すから、あとは自分らに任してええな？」

「了解」

「りょーかい」

ここで能力について説明をしておこう

能力というのは細胞から得られる特殊な力である

例えば白岩 亮、彼の能力は『透明人間』周りの景色に同化し敵に至近距離まで接近することができるが戦闘には向かない

黒井 響の『犬神』は身体能力および、五感（おもに嗅覚）の強化敵を捕捉するのに最適である

と、このように特殊科には他にもさまざまな能力を持った生徒が存在する

そんな中、亘理 紺 彼だけは能力者でも異常である

能力は『小鬼』力の増強と体力と自然治癒速度の強化、本来ならば中々の能力のはずだった

しかし、本来なら常人を遥かに凌ぐはずの力の増強は何故か一般の人間よりほんの少し強くなるだけ、唯一のまともな能力自然治癒は、あくまで怪我をしたときのものつまり負傷すること前提の能力という結果しか出さなかったのだ

つまり彼はほんの少し力が強く、ほんの少し怪我の治りが速い普通の高校生として戦場に立っていた

もちろん普通の高校生が戦えるはずもなく、現在まで討伐した異形といえば戦闘能力の無い雑魚ばかり

実際に彼は何度か死に掛けているが、持ち前の治癒能力で見事生還をし、もう一度戦場へという悪循環を繰り返していたのだ

更に今までに一度も彼が致命傷を負わないのは、周りのフォローあつてのものである、おそらく成績優秀な友人と成績下位の二人組の相当な助けが入ったことであろう

紺「お、オレは？オレの出番は？」

亮「黙れ、役立たず」

響「やること無いなあ」

容赦なく切り捨てられ頂垂れる紺

夏「じゃあ、紺はいざとなったときに呼ぶよ」

紺「な、夏樹いゝ、お前は唯一の親友だ！」

涙を流しながら夏樹の肩に手をまわすが、

夏「うん、いざというときの盾として」

紺「お前なんて嫌いだ」

無情な一言によってまたもガクリと頂垂れてしまっ

亮「まあ、とりあえず行きますか」

紺「チツ、テメーら帰ってきたら覚えとけよ」

夏「響、場所特定できる？」

響「ちよお待ち」

気を引き締め始める四人

そして、響に柴犬のような耳と尻尾が生える

紺「何時見ても見事なわんこだなあ」

亮「ほら、お手」

関心しながら言う紺と右手を差し出す亮

響「よーしお前ら、今から八つ裂きにしたるからそこ座れや」

夏「まあまあ、ほら二人ともからかわない」

響が、鋭い爪を見せながら言い夏樹が嗜めると

？「その奴ら、動くな！」

凜とした声が四人に届く

亮「誰だ！」

夏「この声って」

亮が声のする方向に向き直る

「夏樹！？それにこの前の？」

物陰からポニーテールの少女こと藍沢 春が驚いた様子で現れる

紺「あ、藍沢さん（？）」

夏「やっぱり、姉さんなんでここに？」

うるたえつつ頬を赤らめる紺を見て小さく「キツ毛」と呟く響と実

の姉の登場に少し目を見開く夏樹

春「それはこちらの台詞だ、緊急連絡を聞いていないのか？」

響「緊急？なんの話や？」

春は少しあせった様子で尋ねる

春「ついさっきこの辺りに大型が発見された、特殊部隊以外には避

難命令が出た」

亮「避難命令！？そんなもん俺達が来るときにはなにも無かったぞ

！」

紺「それが本当の話だったらかなりマズ「紺！上だ！」

唐突に響が紺に向かって声を張り上げる

声を聞いたと同時に亮が紺を抱えその場を飛び退くと、先ほどまで

いた場所にコンクリートの塊が降り注ぐ

亮「あつぶねえ！ばさつとしてんなよ！」

春「そこか！」

亮が紺に怒鳴っていると春がコンクリートの降ってきた場所に一目

散に駆け出す

紺「藍沢さん!？」

怒鳴る亮を押し退け後を追う紺

響「紺!おい待たんか!」

夏「響後ろだ!」

響「!しまつ、」ゴッ

紺を引きとめようとする響の背後に巨大な影が現れ響を軽々と吹き飛ばす

亮「チッ、一体だけじゃねーのかよ」

響「っーかここまででかいなんて聞いたらんで」

夏「結構元気だね」

響「頑丈なんが取り柄やからな」

戦闘体制にはいる亮と瓦礫の中の響と軽口を言い合う夏樹

目の前には軽く10mを超える化物

亮「んじゃあ、取り合えずコイツ片してお馬鹿を助けに行きますか」

響「敵に追い詰められピンチになる春ちゃん、後ろには役立たずの

紺、そこに颯爽と割って入るオレ!そこで一言「待たせたな!プリ

ンセス(キラッ)」、めっちゃカッコええやん!」

夏「響駄目だよ、紺は姉さんに良いところ見せるんだから邪魔しち

や、それにダサイ」

響は瓦礫から這い出してきて妄想に浸るものの夏樹によって強制終了をさせられてしまう

響「お前なあ、ええ加減そのシスコンなんとかせんかい、あとなつ

くんの最後の一言によって響くんの心はスタボロです!」

亮「お喋りはそこまでにしとけ、あと響さすがにプリンセスは寒い」

軽口を叩く二人に向かって注意をする亮

亮「来るぞ」

そして化物が拳を振り上げた

所変わって

紺「藍沢さん！何処にいるんですか？！」

春を追いかけてきた紺

しかし、学年主席の足に学園最低が敵うはずもなく見事に置いてけぼりにされていた

紺「藍沢さん！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6846/>

仕官学校 妖冥学園

2010年10月9日06時12分発行